

リージェンツ・パークの設計者 ジョン・ナッシュによる 「田園的ピクチャレスク風景」の創造

芝 奈 穂

キーワード：リージェンツ・パーク、ピクチャレスク、デザイン、ジョン・ナッシュ

はじめに

19世紀前半にロンドンに誕生したリージェンツ・パーク (Regent's Park) は、これまで多くの研究によって、世界に先駆けてイギリスで誕生した都市公園の草分け的存在の一つとして挙げられてきた¹⁾。当該パークはその前身をメリルボン・パーク・エステート (Marylebone Park Estate) と呼ばれた500エーカーからなる王室領に認めることができるが、18世紀終わりから19世紀初めにかけて、王室歳入向上を目的とする投機的開発計画 (以下、「開発計画」と略称) が実施され、ジョン・ナッシュ (John Nash) の指揮のもと、富裕層向け高級住宅地が美しいパークデザインとともに建設されるに至った。そのパーク部分が、1841年以降、段階的に一般開放され、初期の公園として広く知られるようになった。特に、当該デザインは人口に膾炙し、19世紀半ば以降、イギリス各地に公園建設が盛んになった際、それを模倣した緑地が諸都市に出現したのである。

果たしてそのデザインのいかなる優れた要素が巨大な影響力を持つに至ったのであろうか。鍵となるのは、ナッシュ自身がそのデザインコンセプトとして明らかにしている「田園的ピクチャレスク (picturesque) 風景」デザインであろう²⁾。ピクチャレスクとは、当時、イギリス社会を席巻した美的理論であり、ウヴェデール・プライス (Uvedale Price) やリチャード・ペイン・ナイト (Richard Payne Knight) 等によって提唱された。これらの人々とそれに異を唱えたランドスケープ・ガーデナーのハンフリー・レプトン (Humphry Repton) との間に論争が繰り広げられ、その影響は建築や風景、美術の分野にとどまらず文学や庭園デザインにも及んだことはよく知られている。ナッシュは、自身の理論や実践を著書に残しておらず、彼自身によるピクチャレスクの定義は決して明

瞭とは言えないものの、プライスやレプトンとの親交を通じてその理論には精通しており、本開発計画に従事する頃には、新古典主義から出発したピクチャレスクの建築家としての名声を築いていた³⁾。本稿は当時のピクチャレスク理論の一部の主要言説を軸に、ナッシュがリージェンツ・パークで創出したピクチャレスクな風景の役割について論じることを目的とする。

David Watkin や John Macarthur らによるピクチャレスク全般に関する研究で示されてきたように、当時展開されたその理論は広範囲に及ぶ概念であり、プライスやナイト、レプトンらの主張の全体像を把握すること自体、困難を極めるものである⁴⁾。ましてや、ナッシュ自身のピクチャレスク理論に関する立場が明瞭でないゆえに、当該パークのピクチャレスク性を考察することは容易ではない。先行研究においても、たとえば、John Summerson や Ann Saunders の論考に見られるように、そのデザインについて言及している例はあるものの、ピクチャレスクの要素に焦点を絞った研究が多いとは言えない⁵⁾。Dana Arnold による論稿は、ピクチャレスクデザインを分析しているが、議論の中心を占めるのは、ナッシュの指揮のもと、実際の建築を請け負った建築家の1人であるデシムス・バートン (Decimus Burton) にあるため、ナッシュの意図を探究していると言い難い⁶⁾。この点に関して、もっとも主要な文献は、J. Mordaunt Crook の論考と Todd Longstaffe-Gowan による著作が挙げられる⁷⁾。前者は、ナッシュが作成した複数の設計図の変遷を軸に、ピクチャレスクの要素を描写した示唆に富む研究であり、後者はその設計における風景と建築物の関係をピクチャレスクという観点で論じた点が評価に値しよう。

本稿では、Crook と Longstaffe-Gowan の研究の視座に立ち、当該デザインのピクチャレスクな風景に込められたナッシュの構想について論じるが、ナッシュによる設計図の分析だけでなく、彼が指揮した建設過程にも焦点をあて考察することとする。ナッシュが開発計画においてピクチャレスクな風景を創出するに至った背景とはどのようなものであったか。彼のピクチャレスクに対する概念は、当時の理論と照らし合わせて、どのように位置づけられるのか。さらに、彼のピクチャレスクヴィジョンは、本開発計画における風景づくりにいかに投影されたのか。これらの問題について考察しながら、後のイギリス国内の公園設置の規範へと発展しうるほど影響力をもった彼のピクチャレスクデザインの本質に迫ることとしたい。

1. 王室エステート計画とピクチャレスクな風景の萌芽

当該パークにおけるピクチャレスクな風景の誕生を探究する上では、出発点となった開発計画に着目することが肝要である。当該計画におけるエステート開発、いわゆる開発計画の側面については拙論で述べたとおりであるが、その最大の目的は王室歳入の向上であった⁸⁾。1760年、ジョージ3世と議会の間で、国王が王室費「シヴィル・リス

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

ト」を議会から受領するかわりに、王室領の管理を政府に譲渡するという取り決めがなされた。それ以降、王室領の地代は、政府の収入となったが、折しも相次ぐ外国との戦争により国家財政が危機に瀕した状況下で、歳入増を図るためには王室領の効率的な運営が急務とされた⁹⁾。特に重視されたのが、首都に位置しながら、ほぼ手付かずの状態 で放置されていた当該王室エステートの処遇であった。当地はもともとヘンリー 8 世の鹿狩り場として存在したが、18世紀の後半から19世紀の最初にかけては近隣の地主貴族に農地として安価で貸し出されているに過ぎなかったのである。

開発計画の骨子は、地税局の測量長官（the Surveyor-General）ジョン・フォーダイス（John Fordyce）、そして、彼の死後、森林局（Office of Woods, Forests and Land Revenues）によって形作られたが、その多くがロンドンの地主貴族の伝統に拠っていることについても拙論で述べたとおりである¹⁰⁾。従来のエステート開発においては、テラスハウス（terrace）と呼ばれる連結住宅が建設され、同時に地域全体の道路建設や下水整備、スクエア（square）と呼ばれる住人だけが利用できる樹木の備わった広場の設置等も行われるのが常であり、環境整備にも力を注ぐことにより、富裕層の定着の促進を図ったのである¹¹⁾。フォーダイスによる1809年のレポートおよび森林局が1810年に作成した設計方針においては、道路計画、運河計画、街灯計画、市場設置等とともに住宅開発が行われるべきであると定められている¹²⁾。

しかし、住宅については、伝統的地主貴族のエステートとは異なる点がある。すなわち、テラスハウスの建設だけでなく、ロンドンの中心から離れている点を考慮し、特に敷地の北側部分には「5～10エーカーの小区画に分け、ヴィラ（villa）を形成する」ことも提案されている¹³⁾。ヴィラとはイタリアで発生した住宅様式で、イギリスには17世紀以降にもたらされ、貴族が田舎の地所や郊外に別荘として建設したカントリーハウスに準ずる住宅のことである¹⁴⁾。したがって、多様な形式を取り入れることにより、より理想的な空間を形成し、「身分や財産のある人」を誘致しようとしたことは明らかである。それは最終目的である「首都に立派でエレガントで広々とした環境を付け加えながら歳入を改善すること」に直結する重要な要素であった¹⁵⁾。

森林局の意図を設計図という形でビジュアル化して提示したのが、局に属する建築家ナッシュである。彼の1811年に設計した第1設計図では、その後実際に建設されることになる要素のほとんど、すなわち、運河、湖、周回道路、樹木、オープンスペース、そして、住宅地であるテラスハウスとヴィラ等がすでに描出されているのを見とることができる。後の設計図と比べて明らかに幾何学的要素が顕著に見られ、より伝統的エステート開発の側面が強いのは疑いようもない。

この点に難色を示したのが、森林局の上部組織である財務大臣（Chancellor of the Exchequer）にして首相であるスペンサー・パーシヴァル（Spencer Perceval）であり、彼はナッシュに「より建物を少なくし、オープン・グラウンドの面積をより広く」した

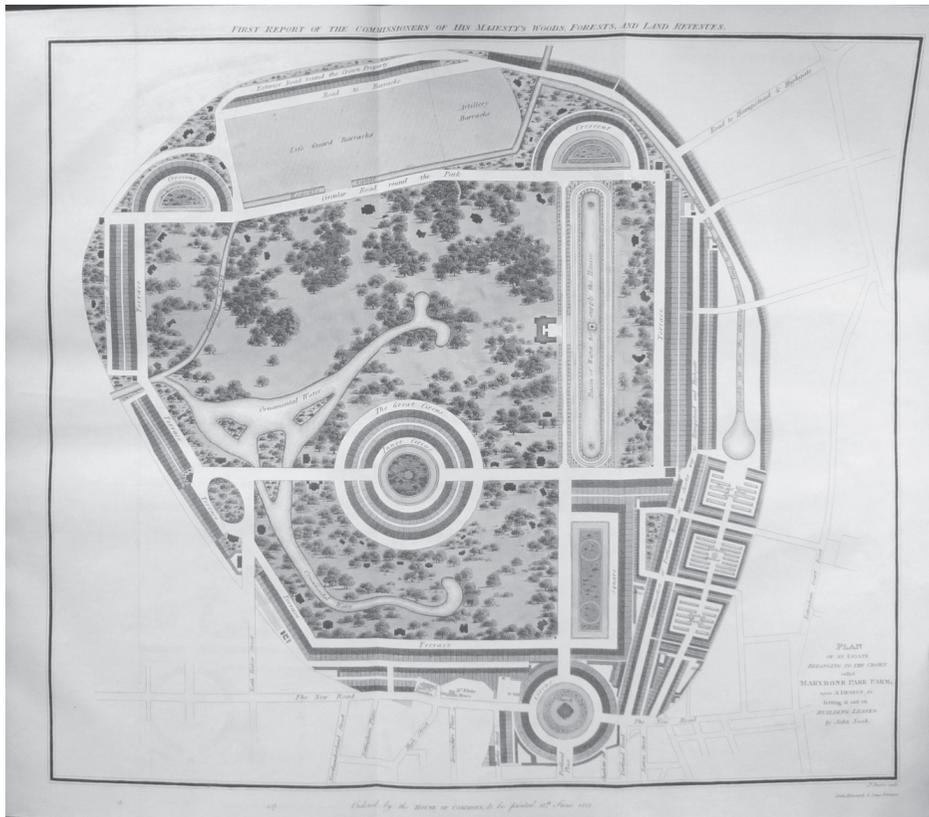


図1 ナッシュによるリージェンツ・パーク第2設計図(1811)

[出典: *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues* (1812)]

新たな設計を命じた¹⁶⁾。これが第2設計図(図1)である。拙論で設計図の変遷における政治的意図について述べたが、パーシヴァルの指示は、公共のアメニティに配慮したものであった¹⁷⁾。歳入増を至上目標とした富裕層を対象とする特権的空間の創造という観点、王室領の運営の根幹であった。一方で、王室領は政府に移管されていることから、本来、その施策は公共一般のものであった。パーシヴァルは首相の立場から野党による反発を躲かすため、富裕層対象の住宅数をより削減し、かわりに一般への配慮を示すため緑地を増大させる措置をとったのである。その結果、第2設計図では、テラスハウスは敷地内部ではなく、パークを取り囲むように外周縁に追いやられ、敷地内部のヴィラの数は50戸程度に削られ、よりオープンスペースが広がるレイアウトとなった。とはいえ、この第2設計図が、実質的に公共的利用のためにそれほど役に立たなかったのは、その一般開放が1841年まで実施されなかったことから明らかである。それどころか、森林局は住宅計画の縮小および緑地の拡大を排他性を高めることに利用さえして

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

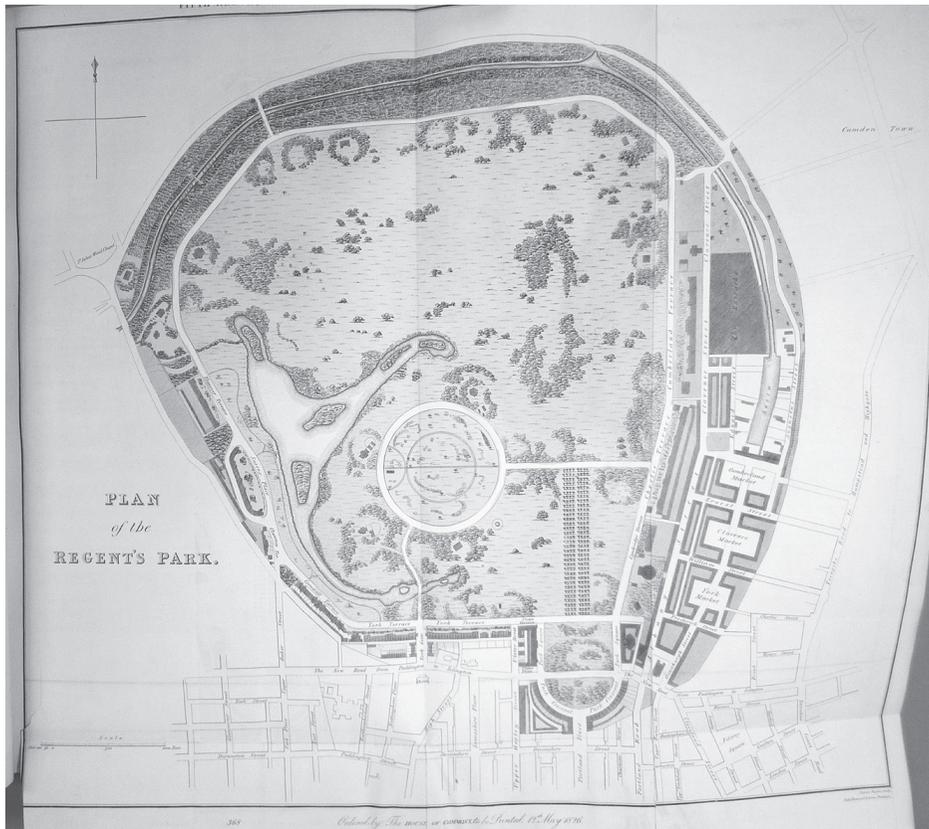


図2 ナッシュによるリージェンツ・パーク第4設計図（1826）

【出典：The Fifth Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues (1826)】

いる。彼らは住宅数が制限されても、オープンスペースが増加しているので、より好ましい環境を構築することができ、これが「テラスハウスやヴィラの区画をより高い賃貸料でリースし得ること」につながるため、最終的にはより効果的な王室歳入増を成し遂げることができると主張するに至った¹⁸⁾。その後も森林局の方針により、第3設計図を経て、最後の第4設計図（図2）に至るまでヴィラの数は減少の一途をたどり、かわりに広大なオープンスペースが配置されたことからすれば、富裕層へのアピールという点に対してこの考え方が有効であったことが窺える。

しかし、パーシヴァルの指示した第2設計図の作成は、ピクチャレスクデザインの誕生という副産物をもたらした。この点は重要である。ナッシュは「より建物を少なくし、オープン・グラウンドの面積をより広く」という注文を「ピクチャレスク」という枠組みで組み立てることにしたのである。ここに、「はじめに」で引用したように、「田園的ピクチャレスク風景」が創造されることになった。

2. ピクチャレスク理論の言説におけるナッシュのデザイン（第2設計図）

ナッシュが第2設計図で打ち出したデザインコンセプトでは、当時、イギリス社会に広く浸透したピクチャレスクの流行という観点からの探究が必要である。ピクチャレスクとは文字どおり「絵のような」光景を表す言葉である。その象徴とされたのが、17世紀の画家クロード・ロラン（Claude Lorrain）やサルヴァトーレ・ローザ（Salvator Rosa）が描いたイタリアの幻想的な風景画であった¹⁹。ピクチャレスクの理論家であるプライスやナイトは、しかしながら、単にそのような風景画を模倣した風景の創造を説いたのではなく、「絵画の構成原理を学ぶ」こと、すなわち、画家が提示する視覚的直覚力に重きをおいた²⁰。どのような要素が視覚的快楽（visual pleasure）を与えるのかという観点において、重要な貢献をなしたのがウィリアム・ギルピン（William Gilpin）である。彼は有名なワイ川および南ウェールズへの旅行記を通じて、粗野で荒々しい自然の魅力を描写したが、そのような自然観がピクチャレスクの基本的概念となった²¹。すでに18世紀の半ばにエドマンド・バーク（Edmund Burke）が美と崇高の概念を打ち出していたが、ピクチャレスクはどちらにも属さない第3の領域を表す理念として捉えられた²²。ギルピンに深く傾倒していたプライスは、ピクチャレスクを「不規則性と結び付けられた荒々しさと突然の変化という性質」と位置づけ、具体的には、荒廃した風景やシンメトリーを欠く建築物によって掻き立てられる視覚上の刺激と説明した²³。

このようなピクチャレスクの理念は、庭園デザインにも大きな変革をもたらすこととなった。18世紀をとおして、自然の美を追及した「風景式庭園」（landscape garden）が社会的現象となったことはよく知られている。とりわけ、18世紀半ばに庭園デザイナーとして有名なランスロット・‘ケイパビリティ’・ブラウン（Lancelot ‘Capability’ Brown, 1715–1783）が、数々のカントリーハウスにおいて、なだらかな丘、広大な芝生と点在する樹木の群生（clumps of trees）、大きな湖を持つ Park をデザインし、それがカントリーハウスの庭園様式として定着するに至った²⁴。Park とは、もともと狩猟園もしくは貴族の館カントリーハウスに属する広大な敷地のことを指すが²⁵、ブラウンはカントリーハウスに付随する Park を風景式庭園でデザインし、一時代を築いた。しかし、ブラウンの死後、18世紀の終わりから19世紀初めにかけて展開されたピクチャレスク理論は、彼のデザインに対する徹底的な批判を出発点としていた。プライスやナイトにとって、ブラウンの設計による Park づくりは、自然の美を追及した風景であるはずが、所々に置かれた樹木の塊や邸宅まで迫った芝地等、なめらかで穏やかな景観全てが画一化され、視覚的多様性に欠ける。すなわち、荒々しさや無骨さを肯定するピクチャレスクの資質を著しく欠くものであると非難するのである²⁶。彼らはハートフォードシャーにそれぞれ地所を持つ地主であり、ピクチャレスクに関する自身の理論を自分の地所の改良において実践した。他方、ランドスケープ・ガーデナーとしてハートフォード

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

シャーを中心に活躍していたレプトンは、ブラウンを擁護する立場をとり、ピクチャレスクに異を唱えた。彼は庭園づくりにおいて、視覚的効果だけでなく、利便性や快適さも重視した。これがプライスおよびナイトとレプトン間のピクチャレスク論争のきっかけとなり、やがて有名な公的論争へと発展した²⁷⁾。

両者のデザインの違いは、それぞれの著作や、その他の批評家の出版物で広範囲にわたって議論された。たとえば、ナイトの著作 *Landscape* に掲載された図面（図3上・下）において端的に示されているとおり、図3上は邸宅が自然風の風景式庭園に置かれているのに対し、図3下では、同じ敷地が、生い茂る樹木と蛇行して流れる川とが釣り合っ、ピクチャレスクにレイアウトされている様子が見て取れる²⁸⁾。ここに、ブラウンおよびレプトンによる「風景式庭園」と、プライスおよびナイトの提唱する「ピクチャレスク庭園」の違いが如実に現れていると言える。

プライス、ナイトおよびレプトンの三者は1795年から約10年間にわたって、それぞれの著書を通して、持論を展開したが、ナイトがプライスをも批判するに至って、三つ巴の論争となった。さらに、レプトンのデザインは晩年変化し、最後は、ピクチャレスクな風景もデザインするようになり、特にプライスに対しては一定の理解を示した²⁹⁾。これまでも多くの研究が明らかにしてきたように、ピクチャレスクの理論は多くの面で「混乱している」点は否めない³⁰⁾。

ところで、ナッシュの「ピクチャレスク」に立脚する第2設計図は、上述のピクチャレスク理論の上でどのように位置づけされるであろうか。ナッシュは当該パークの設計に携わる以前の1790年代～1800年代にかけて、ピクチャレスク論争の中心地であったハートフォードシャーで建築家としてのキャリアを積んでおり、三人のことはよく知っていた。とりわけプライスからの依頼により、ウェールズのアベリストウイスにある彼の海岸沿い別荘地にヴィラを建設して以来、親しい間柄となった。一方、レプトンとは、同時期、ハートフォードシャーでいくつもの共同事業を行っており、両者のパートナーシップは1800年頃に仲違いするまで続いた。プライスやレプトンは、自身のランドスケープを完成するために建築家ナッシュの助けを必要とし、逆に、ナッシュは彼らとの共同事業を通じて、ランドスケープについて学んだのである。Charles Watkins らが指摘するように、ナッシュは、プライスとレプトン間の論争のもたらす微妙な間柄に気づいており³¹⁾、したがって、両者間で繰り広げられたピクチャレスク論争についても身近で知り得る立場にあった。実際、ナッシュは2人からピクチャレスクをめぐる様々な観点を吸収している。

したがって、ナッシュ自身はピクチャレスクの定義を行っていないものの、第2設計図で「ピクチャレスク」という言葉を用いた際、ピクチャレスクとそうではないものの違いをはっきりと認識していたと考えるのが妥当である。Longstaffe-Gowan も「ナッシュは美的理論のディスコースへの言及を通じて、彼の議論を公式化し、裏書きする必



図3 上図はブラウンやレプトンが手掛ける「風景式庭園」であるのに対し、下図はプライスやナイトの提唱する「ピクチャレスク庭園」

[出典：Richard Payne Knight, *The Landscape, A Didactic Poem in Three Books, Addressed to Uvedale Price, Esq.* 2nd ed. (London: W. Bulmer and Co., 1795)]

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

要性を感じた。特に、ウィリアム・ギルピンとウヴェデー・プライスによって示されたピクチャレスクの理論を通じて」と論じている³²⁾。前述のとおり、ナッシュ自身が第2設計図を「田園的ピクチャレスク風景」と説明しているが、彼は続けて、その内容について、「樹木や芝生、水の親和によって形成された」風景であり、「それらの親和により、Parkのような性格の全体的な統一性が保たれる」と説明している³³⁾。ここでのParkとは前述の貴族の館カントリーハウスに付随する広大な敷地のことであり、したがって、ナッシュは、そのようなPark的景観を当該開発計画のパークデザインにおいて、ピクチャレスクな趣向で作り出そうとしているのである。つまり、当時のピクチャレスクの枠組みに完全に沿っていると言える。なお、本稿では、開発計画におけるパークと貴族のカントリーハウスに付随するparkをカタカナと英語で区別するものとする。

これに加えて、ナッシュの独自性は、Crookも指摘するように、究極的に貴族の田舎の領地を中心とする価値観であるピクチャレスクをロンドンという都会に取り入れた点に見出せる³⁴⁾。実際、ナッシュは第2設計図の利点を「Parkを占有することになる……ヴィラ、そして、全体を取り囲み見渡す……テラス……の配置によって、その連携を満足いくように完全に形成する」と説明しているが³⁵⁾、これはつまるところ、田舎のカントリーハウスの風景をパークのデザインの核とした上で、その周囲を都会的テラスハウスで囲むということの意味しており、この両者の巧みな融合が彼のデザインの真骨頂であった。森林局が目指した富裕層にアピールするための理想的空間という問いに対して、パーシヴァルの提言を経由して、ナッシュが都会に「田園的ピクチャレスク風景」デザインを適応させたことが彼の最大の功績であったと言える。

3. 第2設計図と第4設計図の比較から見る造成過程とピクチャレスクな風景づくり

第2設計図をもとに、1812年頃から造成が始まり、森林局による1816年の『第2報告書』には、「(設計図)で計画された道路、フェンス、植樹が完了し、建設予定の湖(ornamental water)の湖底が掘られ、リージェンツ運河会社(Regent's Canal Company)がパークの敷地を通る運河の建造を完了した」と報告されている³⁶⁾。したがって、ほぼ4年で基礎工事が完了したことになるが、これらの造成過程の全般にわたって、ナッシュのピクチャレスクな趣向を垣間見ることができる。

道路建設は敷地の外周に沿って設置され、アウター・サークル(outer circle)と呼ばれた。それは、パークへのアクセスのため必須であり、複数のゲートが設置された。しかし、アウター・サークルは単に機能目的だけではなく、ナッシュの中では風景づくりの重要な要素でもあった。というのも、その外側にはテラスハウスがレイアウトされ、Longstaffe-Gowanによれば、それは、パーク内部と周囲のテラスハウスをつなぐ「調和的物理的リンク」の機能を果たした³⁷⁾。すなわち、道路を介して、片側にはパークの景

観、もう一方で、テラスハウスの壮麗美があり、道路を周遊しながら、それらの景色を楽しむことができた。テラスハウスの建築自体は1820年代まで始まらなかったが、すでに第2設計図には、アウター・サークルもテラスハウスも描き込まれており、したがって、設計および基礎工事の早い段階で、ナッシュのヴィジョンにおいては、アウター・サークルのパークデザイン全体像の中で占める役割が確立されていたことになる。第2設計図では、アウター・サークルは円形ではなく、角張っているのに対し、完成に近い第4設計図では円形道路となり、よりピクチャレスク性が増していると言える。

アウター・サークル自体は公道であったが、パーク内部は1841年に部分的に一般開放されるまでは、一般人の利用は考えられておらず、パークにはフェンスが設置された。内部は、敷地内に建設されるヴィラの住人および周囲のテラスハウスの住人にもそのアクセスが限られたのである³⁸⁾。しかし、道路建設と同様、フェンスの設置もナッシュのヴィジョンにおいては、景観の創造に一役買うものであった。David Lambert および Longstaffe-Gowan らによれば、柵は、木製フェンス (wooden fence) であり³⁹⁾、完全目隠しではないので、テラスハウスの住人たちがパークの景観を見通すことができた。さらに、パーク内部からも、道路、テラスハウスへの眺望が確保された。風景づくりにおけるフェンスの役割についても、ナッシュの初期のヴィジョンにすでに内包されていたのである。

しかし、ピクチャレスク理論のコンテキストにおいて、ナッシュが追求したもっとも重要な要素はなんと言っても樹木の存在である。そもそもその理論家たちにとって、樹木は「複雑さ」や「不規則性」を表す根本的要素であった。Lambert および Longstaffe-Gowan が指摘するように、植樹に関して彼らに示唆を与えたのはやはりギルピンである。彼の複数の旅行記のうち、イングランド南部のニュー・フォレスト (New Forest) の旅行記は、森林牧草地の風景描写を含んでおり、そこでギルピンは、草食動物が喰んだことにより自然に刈り込まれた芝地と低木からなる植え込みが見事に調和された風景を不規則性と多様性が絡み合う景観と評し、「これまでみたどの庭園よりもすばらしい」と絶賛している⁴⁰⁾。さらに、ギルピンから大いなる影響を受けたプライスも森林と芝生が組み合わさった景観を最も重んじており⁴¹⁾、自身の館フォックスリー (Foxley) を含むランドスケープ造りで、そのような風景を作り出した。

近年の研究により、ギルピンやプライスの影響を受けて、ナッシュは森林芝地 (Forest lawn) を基本とするピクチャレスクな植樹方法を発展させたことが明らかになってきた⁴²⁾。これらの研究は、同時代人 Prince Hermann von Pückler-Muskau が自身の著作に掲載した図 (図4) に依拠して、ナッシュがギルピンやプライスのようなピクチャレスクな植樹を当該パークで採用したことを論証している⁴³⁾。Pückler-Muskau の図には、従来の植樹 (上部分) とナッシュによる植樹 (下部分) の違いが示されているが、前者では、敷地の縁に配置された樹木や灌木 (shrub) の高さがそろえられ、それらが生み出

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）



図4 上部分が旧来の様式、下部分がナッシュによる様式

[出典：Prince Hermann von Pückler-Muskau, *Hints on Landscape Gardening*, translated by Bernhard Sickert (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917) p. 73, Plate IV]

す輪郭線がはっきりと示され、さらに、前面の芝地にレイアウトされた木立もこぎつぱりと置かれているのに対し、後者では、縁の樹木や木立の高さは異なり、輪郭線もぼやけ、芝地の木立もより不規則に配置されている。前者はブラウン的景観であり⁴⁴⁾、ナッシュのものは、「複雑性」を重視したレイアウトであることは明白であり、ナッシュによる樹木および灌木の配置が、当時のピクチャレスクの流れを汲むものであったのは間違いない。ナッシュによる「ピクチャレスクな植え込み」(Picturesque shrubbery)は、当該パークで実践され、その後、彼が手掛けたセント・ジェームズ・パーク (St James's Park) の改修設計において完成する。それが、この時代の森林樹 (forest trees) を使用したピクチャレスクによる植え込みの基本となった⁴⁵⁾。

ナッシュの植樹への熱意とその「ピクチャレスクな植え込み」への発展は、建設過程からも裏付けることができる。ナッシュが基礎工事の中で最初に取り組んだのが植樹で

あるが、それは、樹木がParkの美を左右するという彼の信念からであった。ナッシュは、「樹木が成長し、風景が美しさを増すこと」によって「建設予定地の価値も上昇し」、それにより、いずれ住宅地が建設された際、より高い階級の賃借人を惹きつけることができる」と述べている⁴⁶⁾。Summersonによれば、1816年までに14,500本以上の樹木が3軒の園芸業者によって植えられたが、ナッシュの指揮により用途に合わせて2つの異なるパターンがとられた。1つ目の方法は、主にパークの美観を急速に高める目的で住宅建設予定地に大規模に行われ、後にその敷地が建設のために整地される際に切り出され木材として売却された。それは、2種類の森林樹をペアーにして交互に規則正しく植えていくやり方で、種目はプラタナスとカバノキ、スズカケノキとオーク、カラマツとヨーロッパグリ等であった⁴⁷⁾。

しかし、「ピクチャレスクな植え込み」として注目すべきは、樹木や低木を自然な形で植えていく2つ目のパターンであり、ヴィラの建設予定地に採用され、それらの大半はそのまま残された。ヴィラ建設に関して、ナッシュは設計図作成段階から思い入れがあったように窺われる。その設計方針として、「どのヴィラも他のヴィラを見ることはない。……また、テラスハウスの家々の立つパークを見渡すどのストリートもヴィラを見ることはない」という大前提を掲げていることから分かる⁴⁸⁾。ナッシュはそれを実際の基礎工事において、植樹によって解決しようとした。彼は「ヴィラの敷地の植樹はパークの景観のためのものであり、ヴィラを互いから遮るためのものである。それは、1つの完全なパークを表現するための主要な目的である」と述べており⁴⁹⁾、ヴィラのための装飾的な植樹がナッシュにとって最重要な課題であった。さらに、後に、「ヴィラを隠すために、森林樹の密集によって囲まれた小さな植え込み (small shrubberies) を持つ予定である」とも記しており⁵⁰⁾、まさに、「ピクチャレスクな植え込み」によってヴィラの周辺の整備が実行されたことを裏付けるのである。

これまであまり深く探究されてこなかったが、ナッシュの森林芝地への強い思い、とりわけヴィラを中心とした「ピクチャレスクな植え込み」は設計図上でも読み解くことが可能である。第2設計図では、樹木は敷地全体に鬱蒼と繁っており、おそらく、2つのパターンの両方が描き込まれていると思われる。最初の規則正しいパターンについては、敷地の外周縁を取り囲む形で樹木が敷き詰められている点に求められる。2つ目のパターンであるヴィラを隠すためのより装飾的な「ピクチャレスクな植え込み」については、敷地全体に点在する形でレイアウトされている50戸ほどのヴィラの周囲に施されており、完全に円形で取り囲むのではなく、半円形か馬蹄形になっているのを見てとることができる。すなわち、ヴィラの住人のためにパークの眺望を確保した上で、互いに他のヴィラの視界に入らないような工夫であると考えられる。ヴィラの中で最大のものは、ナッシュが時の摂政皇太子 (Prince Regent) のために考案したものである。それは中心よりやや東側に、縦に細長い貯水池 (Basin) に面してかなり大きな建物として

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

レイアウトされている。先に述べた道路やフェンスが、建設後のテラスハウスとの調和を見越して設置されたのと同様に、まだ存在しないヴィラとの景観を予測して、樹木を装飾的に植えていったものであろう。

さらに、第4設計図では、すでに売却用に植えられた樹木は姿を消し、ヴィラを取り囲む形で馬蹄形に植えられた樹木のグルーピングが目視できる。第1節で述べたとおり、ヴィラのは数は減少の一途をたどったが、1823年の第3設計図の段階では建設予定戸数が26戸と約半減し、3年後の第4設計図ではわずか8戸となった。しかし、第4設計図作成の時には、すでに敷地予定地として26戸分の植樹は完了しており、ヴィラはそのうち8戸しか建設されないものの、馬蹄形の植え込みが26戸近く存在することが確認できる。前述の摂政皇太子のヴィラも実現されずに終わったが、その予定地だった場所には、馬蹄形の植え込みが南北に挟む形で残されているのが見受けられる。第2設計図と比較して、第4設計図では、ヴィラのが数が減り、売却用の樹木が姿を消したため、より樹木のが数が減り、その分、芝地が広がったが、「ピクチャレスクな植え込み」を中心とした森林芝地であることに変わりはない。ヴィラのが数が減らされようとも、ナッシュのヴィジョンにおいては、最初から一貫してヴィラを中心とした「ピクチャレスクな植え込み」があったと結論づけ得るのである。

当該パークの西部にレイアウトされた湖もピクチャレスクな要素が明確に表現されている個所である。ブラウンの湖と比較して、その形状や湖上の島、その周囲の植樹のあり方等において大きな相違がある。ブラウンの湖は蛇状にくねった形状の湖が特徴的であり、概して細長いものが多い⁵¹⁾。それに対して、ピクチャレスクの湖は、その形状が不規則に変化している点に特徴が認められる。ナッシュの設計図に表されたパークの湖もあえて形状を表現するならばY字型で、その湖岸線は不規則である。とりわけ、触手(tentacle)とも言うべき接触地点が「多様性」や「複雑性」に富んでおり、“ornamental water”と呼ぶにふさわしい湖となっていることが第2設計図および第4設計図から窺い知れる。湖上の島についても、ブラウンのものが1個であることが多いのに対して⁵²⁾、ナッシュの第2設計図では3つ、第4設計図では5つに増えている。さらに、湖岸沿いの樹木についてもブラウンらのものとナッシュのそれとでは差異が見られる。前者では、湖岸の樹木は限られており、芝地が湖岸へとそのまま続く風景が特徴的であり、こざっぱりとした印象を与えるものであった。それに対して、ピクチャレスクでは、湖岸にもパーク全体と同様、森林樹による植樹が行われることが多く、ナッシュの第2設計図も樹木に覆われている。特に、触手部分は樹木に覆われ、ピクチャレスクな風情を漂わせている。

最後に、開発計画には当初から運河計画が付随しており、ナッシュによる全設計図にも運河がレイアウトされている。リージェンツ運河はパディントンからパークを經由し、ロンドン北部のイズリントンを通り、ロンドン東部のライムハウスへと流れてい



図5 完成したパーク

[出典：James Elmes, *Metropolitan Improvements, or London in the Nineteenth Century* (London: Jones and Co., 1827)]

る⁵³⁾。運河とパークは同じ頃に考案されたため、計画段階の運河がパークを通過することは最初から既定路線であり、森林局からの設計方針に運河計画も含まれていた。さらに、ナッシュ自身も運河計画のメンバーに名を連ねており、同計画により私益を得ていたとも言われる。このような理由から、ナッシュ自身は運河のレイアウトにも力を入れており、当初、運河と湖を関連させ、ピクチャレスクにデザインすることを考えていた。しかし、森林局のコミッショナーたちは、議会の反対もあり、運河をパーク内部にレイアウトすることに難色を示したため⁵⁴⁾、第4設計図に見られるように、運河はパークの北側、しかも、アウター・サークルの外側に追いやられた。運河のピクチャレスクな配置が実現しなかったこともあり、ナッシュは湖のレイアウトに気を配ったと言うことはできよう。しかも、当初は、湖の水源を運河から得ることを考えていたにもかかわらず、これも運河会社から水の供給不足を理由に許可されなかったため、当時、テムズ川に注いでいたタイバーン (Tyburn) 川なる小規模河川から水源が確保された⁵⁵⁾。

以上のように、ナッシュは道路、フェンス、植樹、湖等の基礎工事を通じて、プライスらによるピクチャレスク理論を発展させた。とりわけ、貴族の私邸で行われていた風景づくりの影響を受けながら、「樹木や芝生、水の親和によって形成された」ピクチャレスクな風景を実現させた。しかも、このようなピクチャレスクな風景は、1820年代に建設された敷地外周沿いの「宮殿のような壮麗さ」を持つ一連のテラスハウス群と見

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

事にマッチするものであった。そのことは、ジェームズ・エルメス（James Elmes）によるガイドブックの挿絵（図5）からも明らかである⁵⁶⁾。ここでは、第2設計図の基本方針に挙げられていたとおり、「田園的ピクチャレスク風景」が都会に溶け込んでいるさまが描かれており、ナッシュの当初のヴィジョンがほぼそのままの形で実現したことを窺わせるのである。

4. ナッシュのピクチャレスク観

ナッシュがギルピンやプライスの影響を受け、ピクチャレスクなデザインを当該パークで実現したことはこれまで見てきたとおりであり、Crook および Longstaffe-Gowan らの研究からも明らかである。他方で、ブラウンやレプトンに影響されたデザインであるとする研究も少なからず存在し、たとえば、Geoffrey Tyack や John Crompton はそのデザインをブラウン／レプトン系列としている⁵⁷⁾。この認識の違いについて考察することは、ナッシュによるピクチャレスク理論を探究する上で重要である。

鍵となるのが次の2点である。1点目は、すでに第2節で触れたように、ピクチャレスクという概念が非常に細かいニュアンスを問題としており、両者の間の差異が判然とし難いということである。ピクチャレスク論争が起こった18世紀末から19世紀初頭にかけて、より具体的には1790年代から1800年代にかけて、ピクチャレスク論争の焦点が変化し、ナイトが仲間であるプライスを批判したり、最終的にはレプトンがプライスの考え方にある程度理解を示すようになったりしたことはすでに述べたとおりである。実際、レプトンは、後半生において、ピクチャレスクの風景もデザインしている⁵⁸⁾。このように主な登場人物たちの理論や考え方が変化しただけでなく、両者の間には相違だけでなく、いくつかの類似点のあったことは事実である。とりわけ、プライスとレプトンの間には、次稿で見ると、視点（view）の作り方や邸宅の周囲のプレジャー・グラウンド（pleasure ground）と呼ぶ空間のデザイン方法において、かなり似通った点を見出すことができ、それはナッシュにも影響を与えている。ここにピクチャレスクを論じる難しさがあり、それは、現在において、当時以上にピクチャレスクを語ることの難しさへとつながる。Macarthur が指摘するように、今日、ブラウンの庭園デザインですら、しばしばピクチャレスクと呼ぶようなことが出てくるのである⁵⁹⁾。さらに、今日では、風景式庭園とピクチャレスク庭園が混同されているくらいすらある。しかし、ピクチャレスク論争のコンテキストにおいて考察するならば、前者はブラウンや初期のレプトンの景観であり、後者はプライスの景観であったのは間違いない。ナッシュは、レプトンの影響も受けていたが、当該パークの全体的デザインという観点では、Longstaffe-Gowan が指摘するように、ギルピン／プライス系列のピクチャレスクであったと考えるのが妥当であろう⁶⁰⁾。

さらに、もう1つの重要な点は、第2設計図と第4設計図を比較した場合、一瞥した

だけでは、前者に比べて後者の方がピクチャレスクの度合いが減少しているように見えることである。第2設計図では前述のとおり、樹木が全体にわたってこんもりと繁っているのに対して、第4設計図では、馬蹄形に置かれている。この部分だけを見るならば、ブラウン的な点在する樹木の群生のように見えなくはない。しかし、この馬蹄形の植樹こそ、ナッシュが苦心したヴィラのデザインの一部であり、「ピクチャレスクな植え込み」の真髄であった。したがって、第4設計図では、第2設計図と比べてより樹木が減少し、芝地が増えたものの、ピクチャレスクが減じたとは言えない。ましてや、それはブラウンの風景の特徴である樹木の群生とは本質的に異なるものであったことは指摘しておきたいところである。

おわりに

ナッシュがリージェンツ・パークのレイアウトおよび造成に従事した際、建築家としておよび全体の指揮官として、数多くの困難な事柄に遭遇し、対処しなければならなかったことは容易に想像できる。それは、プライスやレプトン等の同時代人が経験した以上のものではなかったろうか。すなわち、ナッシュの雇用主は政府であり、その要求事項は一人や二人の富裕の者の希望をはるかに超えるものであった。1810年代の当該パーク計画は、ナポレオン戦争のピークと重なっており、政府は早期かつ多額の戦費調達に逐われていたことから、ナッシュはデザインの照準を絶えず変化に合わせていかなければならなかった。このため、歳入増を図る当該計画において、ナッシュはこの危機を臨機応変に処し、最終的にプライスの原理にしたがったピクチャレスクな風景を都市に出現させた。これはナッシュの偉業であり、同時代の建築家やデザイナーたちを凌駕する功績である。

ナッシュの当初のヴィジョンには公共のアメニティの要素が乏しかったのはマイナス点であるが、ロンドンにこれほど広大な敷地を持つ緑の空間が残されたのは、結果的には、森林局とナッシュの功とも言える。皮肉にも、彼の作り上げた富裕層向けの空間が一般人の使用に供されるに至って、富裕層のためのピクチャレスクな風景は、一般人にとっても希求される場所となった。さらに、このピクチャレスクなコンセプトがその後のイギリス国内、延いては国外にも波及して公園形態の基礎を形作ったとも言い得る。その詳細についてはまた稿を改める必要があるが、当該パークの模倣が1840年代以降の多くの初期の公園形態に認められる。たとえば、ジョゼフ・パクストン (Joseph Paxton) が1847年にデザインしたバーケンヘッド・パーク (Birkenhead Park) では、外周縁を蛇行する周回道路の存在、湖の形、樹木のグルーピングの仕方、牧草地のような広大な芝地等において、ナッシュが打ち出したピクチャレスクなヴィジョンの影響が窺える。さらに、敷地の外周沿いに住宅地をレイアウトすることによって、公園と住宅地を組み合わせる方式もナッシュのデザインにその源流を見出すことができよう。これ

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

は、住宅地からあがる地代を造営費および維持費に充当するという優れた経営方法を提供しつつ、田舎と都会の融合をはかったナッシュの技の再現であった。現在においてですら、美しい公園風景の創造により、周囲の地価の上昇を見込むことができるという利点は、都市計画の基本として受け継がれている。ナッシュが公園デザイン、とりわけ、ピクチャレスクな風景の創造という観点において、後世の公園計画に与えた影響は計り知れない。当該パークのピクチャレスクをめぐる理念が公園の原風景となったと言っても過言ではないのである。

注

- 1) Thomas Hall, *Planning Europe's Capital Cities: Aspects of Nineteenth Century Urban Development* (London and New York: Routledge, 1997) p. 315.
- 2) *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues* (1812) Appendix 12 G, p. 113.
- 3) *John Nash: Architect of the Picturesque*, ed. Geoffrey Tyack (Swindon: English Heritage: 2013) Introduction.
- 4) David Watkin, *The English Vision: Picturesque in Architecture, Landscape and Garden Design* (London: John Murray Publishers, 1982); John Macarthur, *The Picturesque: Architecture, Disgust and Other Irregularities* (London & New York: Routledge, 2007).
- 5) John Summerson, *The Life and Work of John Nash Architect* (London: George Allen & Unwin, 1980); Ann Saunders, *Regent's Park: A Study of the Development of the Area from 1086 to the Present Day* (London: Bedford College, 1969).
- 6) Dana Arnold, *Rural Urbanism: London Landscapes in the Early Nineteenth Century* (Manchester: Manchester UP, 2005) Chapter 2.
- 7) J. Mordaunt Crook, "John Nash and the Genesis of Regent's Park," *John Nash: Architect of the Picturesque*, ed. Geoffrey Tyack (Swindon: English Heritage: 2013) pp. 75–100; Todd Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden 1740–1840* (New Haven and London: Yale UP, 2001).
- 8) 拙論「19世紀初頭における王室リージェンツ・パーク・エステート計画に関する考察」『愛知学院大学文学部紀要』44 (2014): pp. 71–82.
- 9) James Anderson, "Urban Development as a Component of Government Policy in the Aftermath of the Napoleonic War," *Construction History* 15 (1999): pp. 23–4.
- 10) 拙論「19世紀初頭における王室リージェンツ・パーク・エステート計画に関する考察」
- 11) John Summerson, *Georgian London* (1945, New Haven and London: Yale UP, 1988) Chapter 5.
- 12) 前者については *The Fourth Report of the Surveyor General of His Majesty's Land Revenue* (1809); 後者については 8th October 1810, Office of Land Revenue, Cres 24/6; Office of Woods, 6th October, 1810, Cres 2/1736 のいずれにも同じメモがある。全て The National Archives 所蔵。
- 13) 8th October 1810, Office of Land Revenue, Cres 24/6; Office of Woods, 6th October, 1810, Cres 2/1736.
- 14) Dana Arnold (ed.), *The Georgian Villa* (1996, Stroud: The History Press, 2011) pp. ix–xii.
- 15) 8th October 1810, Office of Land Revenue, Cres 24/6; Office of Woods, 6th October, 1810, Cres 2/1736.

- 16) *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues*, p. 11.
- 17) 拙論「リージェンツ・パーク設計の政治学—王室エステート計画から一般開放へ」『ヴェクトリア朝文化研究』15 (2017): pp. 45–67; Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” p. 78も参照。
- 18) *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues*, p. 11.
- 19) Macarthur, *The Picturesque*, p. 7.
- 20) 岩井茂昭「イギリス風景式庭園と「ピクチャレスク」の概念」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』3 (2) (2013): p. 40.
- 21) Macarthur, *The Picturesque*, p. 4.
- 22) Charles Watkins and Ben Cowell, *Uvedale Price: Decoding the Picturesque* (Woodbridge: The Boydell Press, 2012) p. 1.
- 23) Uvedale Price, *Essays on the Picturesque: As Compared with the Sublime and the Beautiful and, on the Use of Studying Pictures for the Purpose of Improving Real Landscape*, 3 vols. (London: J. Mawman, 1810) I, pp. 50–1, quoted in Macarthur, *The Picturesque*, p. 124.
- 24) Macarthur, *The Picturesque*, pp. 4, 179–80.
- 25) George F. Chadwick, *The Park and the Town: Public Landscape in the 19th and 20th Centuries* (London: The Architectural Press, 1966) p. 19; 門井昭夫『ロンドンの公園と庭園』（東京：小学館スクウェア，2008）p. 21を参照。
- 26) Macarthur, *The Picturesque*, p. 9; Watkins and Cowell, *Uvedale Price*, p. 1.
- 27) 論争については Stephen Daniels, *Humphry Repton: Landscape Gardening and the Geography of Georgian England* (New Haven: Yale UP, 1999) Chapter 3を参照。
- 28) Richard Payne Knight, *The Landscape, A Didactic Poem in Three Books, Addressed to Uvedale Price, Esq.* 2nd ed. (London: W. Bulmer and Co., 1795). また、この図については、Daniels, *Humphry Repton*, pp. 112–3も参照。
- 29) Daniels, *Humphry Repton*, pp. 142–3; 今村隆男「R. P. ナイト『風景』とピクチャレスク」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』66 (2016): p. 13.
- 30) David Lambert & Todd Longstaffe-Gowan, “Planting Principles and Design,” (2019): p. 6.
- 31) Watkins and Cowell, *Uvedale Price: Decoding the Picturesque*, p. 93.
- 32) Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden*, p. 235.
- 33) *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues*, Appendix 12 G, p. 113. また、Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” p. 82も参照。
- 34) Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” p. 81.
- 35) *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues*, Appendix 12 G, p. 113.
- 36) *The Second Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenue* (1816) p. 17.
- 37) Todd Longstaffe-Gowan, “Reinstating John Nash’s Picturesque Vision at Regent’s Park, London,” *Garden History* 43: Suppl. 1 (2015): p. 89.
- 38) *Ibid.*, p. 88.
- 39) Todd Longstaffe-Gowan & David Lambert, “‘A Total Work of Architectural and Landscape Art’: A Vision for Regent’s Park,” (2017) p. 15.
- 40) Lambert & Longstaffe-Gowan, “Planting Principles and Design,” p. 6.
- 41) *Ibid.*

リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造（芝）

- 42) Mark Laird, *The Flowering of the Landscape Garden: English Pleasure Grounds 1720–1800* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1999) p. 266; Kim Legate, “Shrubbery Planting (1830–1900),” *The Regeneration of Public Parks*, ed. Jan Woudstra and Ken Fieldhouse (London: E & FN Spon, 2000) pp. 99, 104; Lambert & Longstaffe-Gowan, “Planting Principles and Design,” pp. 8–10.
- 43) Prince Hermann von Pückler-Muskau, *Hints on Landscape Gardening*, 1834, quoted in Lambert & Longstaffe-Gowan, “Planting Principles and Design,” p. 10.
- 44) Laird, *The Flowering of the Landscape Garden*, p. 264.
- 45) Jan Woudstra, “Landscape Gardening and the Metropolis: Reptonian Influences on John Nash’s Transformation of St James’s Park, 1814–30,” *Garden History* 47 (2019): pp. 102–4.
- 46) *The First Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, Forests, and Land Revenues*, Appendix 12 B, p. 87.
- 47) Summerson, *The Life and Work of John Nash*, p. 116. また、Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden*, p. 243 も参照。
- 48) *The First Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, Forests, and Land Revenues*, 12 B, p. 86.
- 49) The National Archives, Cres 2/742, quoted in Summerson, *The Life and Work of John Nash Architect*, p. 115.
- 50) The National Archives, Nash to Milne, 18 January 1822, Cres 2/771, quoted in Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden*, p. 240.
- 51) Wendy Bishop, “The Origins and Evolution of Ornamental Lakes in English Designed Landscapes,” PhD, September 2017, pp. 154, 302–3.
- 52) *Ibid.*, p. 303.
- 53) Summerson, *The Life and Work of John Nash Architect*, p. 68.
- 54) Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” pp. 78–82.
- 55) Saunders, *Regent’s Park*, p. 93.
- 56) James Elmes, *Metropolitan Improvements, or London in the Nineteenth Century* (London: Jones and Co., 1827) p. 19.
- 57) Geoffrey Tyack, *Two Early Panoramas of the Regent’s Park: The Panoramas of Richard Morris and John Mortimer* (London: London Topographical Society, 2015) p. 3; John Crompton, “The Role of the Proximate Principle in the Emergence of Urban Parks in the United Kingdom and in the United States,” *Leisure Studies* 26 (2007): p. 216.
- 58) Daniels, *Humphry Repton*, pp. 139–43.
- 59) Macarthur, *The Picturesque*, p. 9.
- 60) Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden*, p. 235.